

## 心不相応行法と無為法の関連性

村上 明 宏

### はじめに

心不相応行は有為法の一つであり、五蘊の中の行蘊に含まれる法として知られている<sup>1</sup>。また、五位（五事、五法）と呼ばれる法体系の一つでもある。この心不相応行は部派仏教の時代になってから生じた法であると言われている<sup>2</sup>。

この心不相応行は、*Abhidharmakośabhāṣya*（以下 *AKBh*）などでは十四法を数える<sup>3</sup>。しかし、説一切有部の論書において、その数え方は統一されていない。『阿毘達磨法蘊足論』（以下『法蘊足論』）『阿毘達磨品類足論』（以下『品類足論』）では十六法を数える<sup>4</sup>。『阿毘曇甘露味論』（以下『甘露味論』）では十七法を数える<sup>5</sup>。十四法を数えるようになるのは『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』に至ってからである<sup>6</sup>。しかし、その分類された十四法の項目についても『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』と *AKBh* とを比較すると異なっている。さらに、それらの論書では、心不相応行として分類された法の項目もまた、統一されていない。

しかし、数と項目が統一されていないと雖も共通項はある。*AKBh* などの十四法の項目は 1. 得 (*prāpti*) 2. 非得 (*aprāpti*) 3. 衆同分 (*sabhāgatā*) 4. 無想定 (*asaṃjñi-samāpatti*) 5. 無想果 (*āsaṃjñika*) 6. 滅尽定 (*nirodha-samāpatti*) 7. 命根 (*jīvita-indriya*) 8. 生 (*jāti*) 9. 住 (*sthiṭi*) 10. 異 (*jarā*) 11. 滅 (*anityatā*) 12. 名身 (*nāma-kāya*) 13. 句身 (*pada-kāya*) 14. 文身 (*vyañjana-kāya*) である。この十四法を基準として心不相応行をみれば、十六法を数える場合、2. 非得が数えられず、得として依得・事得・処得の三つの得として数えられる。十七法を数える場合、この十六法の数え方に凡夫性（異生性）を加えて数える<sup>7</sup>。また、『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』は *AKBh* と同じく十四法を数えるのだが、項目は異なり、2. 非得を数えず、代わりに凡夫性を数える。すなわち、心不相応行それぞれの項目は 1. 得 2. 非得をどう捉えるのか、ということが異なるのみで残りの法については共通している。この故に、心不相応行法

として分類する場合、その根底には一貫した考え方があり、その考え方に基づいて分類されていると考えられる。

先にも述べたように、心不相応行は初期の仏教では考えられていない。心不相応行の根底にある考え方を明らかにすることは、部派仏教の時代に、この心不相応行がいかにして発生したのか、という問題を紐解く鍵になると考える。これを明らかにするために、まず、心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) という語義そのものの解釈がどのようになされているのかを考察してみたい。

### 1. 心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) の語義解釈

説一切有部の論書において、心不相応行は初期の論書<sup>8</sup>とされる『集異門足論』のなかに既にその語が示されている<sup>9</sup>。同じく初期の論書とされる『法蘊足論』では、先にも述べたように十六の心不相応行が立てられる。それ以後、様々な論書の中に心不相応行が説かれていく。しかし、説かれている内容は心不相応行の項目を列挙し、その法がいかなる法であるのかを説明するものである。それ故に「心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra)」という語義そのものについての解釈は『阿毘曇心論』に至って初めて見られる。そして、『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』、*AKBh*、『阿毘達磨順正理論』(以下『順正理論』)では、『阿毘曇心論』と同様に心不相応行の語義解釈がなされる。

心不相応行の語義解釈を『阿毘曇心論』では次のように説く。

非色不相応 説是有為行 (T28.830c25)

非色者。此一切諸法如上所説。非色非色所撰。不相応者無縁故。説是有為行者。有為造故説有為行。(T28.831a6-9)

最初の行に示した一文は頌の部分である。二～三行目に示した箇所は散文の部分である。まず、頌の部分では、心不相応行について説明する。心不相応行は非色の不相応であり、有為行であることを説明している。散文の部分では、この心不相応行についての語義を説明する。まず、非色と説くのは色ではないからであると説明する。不相応と説くのは所縁がないからであると説明する。有為行と説くのは有為造であるからであると説明する。すなわち、「心不相応行」の語義を「非色」言い換えれば「心」と「不相応」と「行」に分けて解釈を与える。

この解釈は『阿毘曇心論経』でも同様である<sup>10</sup>。ただし、有為行については行蘊（行蘊）所撰と説明する。また『雑阿毘曇心論』においても同様の解釈を与える<sup>11</sup>。

このように、この三つの論書における心不相応行の語義解釈は一致している。この三論書では「心不相応行」の語を「心」と「不相応」と「行」に分けて解釈を与える。「心」の語は色でないことを意味し、「不相応」の語は所縁がないことを意味し、「行」の語は有為であることを意味している、という解釈を与える。ただし、「行」の語に関して『阿毘曇心論経』では他の二論書と異なり、行蘊所撰と限定的な解釈を与える。しかし、行蘊も有為であることに変わりはない。行蘊という限定的な説明であっても有為を意味していると考えられる。

これを *AKBh* では次のように説く。

viprayuktās tu saṃskārāḥ prāpty aprāpti sabhāgatā /

āsaṃjñīkaṃ samāpatti jīvitam lakṣaṇāni ca // 35 //

nāma-kāya-ādayaś ca iti (36a)

ime saṃskārā na cittena saṃprayuktā na ca rūpa-svabhāvā iti citta-viprayuktā ucyante / (*AKBh*. p.62,11-14)

「然るに不相応行は得と非得と衆同分と

無想果と〔二つの〕定と命と諸相である。(35)

また、名身などである、ということである。(36a)

これらの行は心と相應するのでもなく、色を自性とするものでもないので心不相応と言われる。」

ここでの心不相応行の語義解釈は「心と相應するのでもなく、色でもない行 (saṃskāra) である」と述べられるのみである。この簡潔な一文からも「行」と「不相応」と「色でないこと」という三つに分けて解釈することもできる。しかし、明確には言明できない。そこで *AKBh* の註釈書である称友 (Yaśomitra) の *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (以下、*SAKV*) での解釈を参照する。

citta-viprayuktā iti citta-grahaṇam citta-samāna-jāṭiya- pradarśana-artham / cittam iva cittena ca viprayuktā ity arthaḥ / kiṃ ca teṣāṃ cittena samāna-jāṭiyatvam / yad arūpiṇo amī bhavanti / rūpitvād eva hi viprayuktatve api rūpaṃ na viprayuktatve

nāma labhate / yad vā amīṣāṃ nāma-rūpam iti nāmatvaṃ tat teṣāṃ cittena samāna-jāṭīyatvaṃ / caittā api cittena tulya-jāṭīyāḥ / te tu cittena saha ālabhanc samprayuktās tad viśeṣaṇa-arthaṃ viprayukta-grahaṇaṃ / asaṃskṛtam api tat samāna-jāṭīyam anālabhanatvena iti tat parihāra-arthaṃ saṃskāra-grahaṇaṃ ata eva āha / ime saṃskārā na cittena samprayuktā na ca rūpa-svabhāvā iti citta-viprayuktā ucyanta iti / (SAKV. p.142,31-p.143,7)

「心不相応と、心を述べるのは、心と同一の種に属することを明示するためである。心のものであり、心と不相応なるものである、という意味である。では、これら「不相応なるもの」について、何故、心と同一の種に属するものであるのか。これら「不相応なるもの」は無色なるものである。なぜならば、色は、まさにかたちあるものであるから不相応なるものでも、不相応であるものにおける名称を得ることはない。あるいは、これら「不相応なるもの」について、名と色、と「いう分類で」言う、名であるものであり、それは心と同一の種に属するものである。心所もまた等しい種に属する。しかし、これらの「心所」は心と所縁とともに相応するものであり、不相応を述べるのは、その「心所」との差別化のためである。無為もまた、その「心」同一の種に属し、所縁をもたないので、その「無為」を除くために行と述べるのであり、この故に、これらの行は心と相応するのでもなく、色を自性とするものでもないで心不相応と言われるのである、ということである。」

ここでは、心不相応行の語義を『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』と同様に「心 (citta)」と「不相応 (viprayukta)」と「行 (saṃskāra)」に分けて解釈を与えている<sup>12</sup>。「心」の語についての解釈は、色ではないことを意味して、それは心の種類に属するものであることを示すためであると説かれている。「不相応」の語については、心の種類であるが、心所ではないことを示すためであると説かれている。「行」の語については、無為ではないことを示すためであると説かれている。

このSAKVの語義解釈は『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』と異なる点が二点ある。まず、「心」の語義について、色ではないことに加えて広い意味では「心の種類に属する」という解釈を与えている点である。もう一点は「行」の語義に関して「心不相応行」から「行 (saṃskāra)」の語を除いた「心不相応」の意味を考えることである。この「心不相応」と言う場合、「無為 (asaṃskṛta)」という意味も含まれる。それ故に「無為ではない」ことを強調し

て有為であることを示すために「行」の語が附されると説く。これが *SAKY* の語義解釈である。この *SAKY* の語義解釈は『順正理論』でも同様になされている。それは次のように説かれている。

無色法中。已弁心心所。今次当弁心不相応行。頌曰

心不相応行 得非得同分

無想二定命 相名身等類

論曰。等者等取句身文身及和合性。類者顯余所計度法。即前種類。謂有計度離得等有蘊得等性。如是諸法。不与心相応故。説名為心不相応行。非如心所与心共一所依所縁相応而起。説心言者。為顯此中所説得等是心種類。諸心所法。所依所縁。皆与心同。亦心種類。為簡彼故。言不相応。諸無為法。亦心種類。無所依縁。故亦是不相応。為欲簡彼故復言行。(T29.396c7-19)

ここでも心不相応行の語義を「心」と「不相応」と「行」に分けて解釈している。「心」については心の種類であることを顕すためであると説く。「不相応」については心所も心の種類であるが、その心所と区別した心の種類を言うためであると説く。すなわち、心所ではないということである。「行」については無為も心の種類であるが、その無為とは区別するためであると説く。すなわち、無為ではないということである。

このように、これらの論書では「心不相応行」の語義を「心」と「不相応」と「行」の三つに分けて解釈する。

この語義解釈のなかの「行」については、説き方こそ異なるものの「無為ではない」ということを顕すための語であることが示されている<sup>13</sup>。それ故に、この「行」についての語義解釈は「無為ではない」ということを強調していると考えられる。また、『阿毘曇心論経』においては、「行蘊所撰」ということが説かれる。説一切有部の論書では、『法蘊足論』以来、行蘊を心相応行と心不相応行に分類する<sup>14</sup>。五蘊で言えば、心不相応行は行蘊に分類される。このことを踏まえて、「行蘊所撰」と説かれていると考えられる<sup>15</sup>。しかし、行蘊も有為であるから、『阿毘曇心論経』においても「有為であること」を強調し、有為に対して無為ではない、ということを書いていられるとされる。

この心不相応行の語義解釈において、「行」の語義が行蘊の「行」を意味していようと、有為法全体の「行」を意味していようと、重要視すべきことは

「有為であって無為ではない」ということであると考えられる<sup>16</sup>。それでは、これらの論書が示す語義解釈で強調される「有為であって無為でない」ことを強調する意図は何かを考えてみたい。

## 2. 「心不相応行が無為ではない」ことを強調する意図

心不相応行の語義解釈において、心不相応行は無為ではない、ということが強調されていた。特に *SAKV* と『順正理論』では明確に無為の語を著して強調していた。「有為であって無為ではない」、すなわち、「無為ではない」ことを強調する意図は何か。無為について考えてみたい。

まず、説一切有部の無為に対する見解を見てみたい。

説一切有部では『集異門足論』以来、無為を三つ数える<sup>17</sup>。それは択滅無為、非択滅無為、虚空である。この無為を三つ数えることについて *SAKV* では次のように説く。

katamaṃ tri-vidham asaṃskṛtaṃ ity apratītatvāt pṛcchati / tri-vidha-grahaṇaṃ  
iyattā-avadhāraṇa-arthaṃ / santi hi kecid ekam eva asaṃskṛtaṃ nirvāṇaṃ ity  
āhur yathā Vātsīputrīyāḥ / paramāṇv-ādayo bahavo asaṃskṛtā iti Vaiśeṣikāḥ / tan  
mata-pratiśedha-arthaṃ iyattā-avadhāraṇaṃ / katamau dvāv iti / pratisaṃkhyā-  
apratisaṃkhyā-nirodhāv eva pṛcchati / na ākāśam / ākāśasya loke prasiddhatvāt /  
(*SAKV*, p.15, 1-5)

「三種の無為とは何か、と、理解され難いものであるから質問する。三種を述べるのは数量を限定して確定するためである。まさに、ある一つのみ無為があるとすれば、涅槃である、と言うのは犢子部のような。極微などを無為に加えたのがヴァイシェーシカ(勝論)である。その考えを否定するために数量を限定して確定する。二つとは何か、と、まさに択・非択滅に関して質問する。虚空ではない。虚空については世間において完成されたものであるからである。」

ここでは、無為の数を三つに限定することは他の無為に対する考え方を否定するためであると説いている。これは無為に対する考え方が部派によって様々であったことを示している<sup>18</sup>。それ故に、無為を三つに限定することが有部にとっては重要な意味をもつことであったと推測される。

一方、心不相応行を認めない上座部では説一切有部と相違して涅槃のみを無

為と考える。この涅槃は有部の三無為に即して言えば択滅無為である<sup>19</sup>。無為が涅槃であることについて *Dhammasaṅgani*（以下 *Dhs*）では、次のように説かれている。

“katame dhammā asaṅkhatā? Nibbānaṃ – ime dhammā asaṅkhatā.”

(*Dhs*.p.244)

「何れの諸法が無為であるのか？涅槃である—これらの諸法は無為である。」

このように上座部では無為を涅槃のみと説く。この無為に対する考え方の相違が心不相応行を認めるか否かに影響を与えている可能性が考えられる。すなわち、無為を涅槃のみと考える場合、心不相応行は認められず、涅槃以外にも無為を考える場合に心不相応行が認められるのではないのか、という可能性が考えられる。もし、そうであれば、説一切有部の説く心不相応行は三つの無為を考えることによって発展した可能性がある。

また、上座部では心不相応行は認められないが、「心相応」と「心不相応」という区分は言及されていると C.Cox 氏は指摘している<sup>20</sup>。その典拠とされているのは *Dhs* の「色 (rūpa) と涅槃 (nibbāna) が心不相応法である<sup>21</sup>」という記述である。上座部では、心不相応、すなわち心と相応しない法は色と涅槃であると説かれる。

この「心相応」と「心不相応」という区分に関する言及は説一切有部の初期の論書である『集異門足論』でも見られる。『集異門足論』では三無為を説き、さらに「心不相応」に関して “saṃskāra” が考えられている<sup>22</sup>。

しかし、説一切有部と相違して、この *Dhs* では「心不相応」に関しての “saṃskāra” は説かれていない。それに対して、説一切有部においては、『集異門足論』の段階で「心不相応」に関しての “saṃskāra” が説かれていた。すなわち、上座部では考えられることのなかった「心不相応」に関する “saṃskāra” を説一切有部は考えていたのである。説一切有部が「心不相応行 (cittaviprayukta-saṃskāra)」を法として分類しているのに対して、上座部がそれを認めないのは無為に対する考え方の相違によるものであると推測される。

## むすびに

心不相応行の語義に解釈を与えると、「心」と「不相応」と「行」に分けた

解釈が与えられている。その解釈における心不相応行の意味は「色でも心所でもない有為法」ということである。特に、そのなかの「行」の解釈は「有為であって無為でない」ということであり、その解釈から「無為でない」ことを強調していた。そして、心不相応行を認める説一切有部と認めない上座部とでは無為に対する考え方が相違している。無為を涅槃のみと考える上座部は心不相応行を認めない。それに対して涅槃 (= 沢減無為) 以外に非沢減無為と虚空を無為と考える説一切有部では心不相応行を認めている。この相違が心不相応行の発生や発展に大きな影響を与えた可能性がある。それ故、説一切有部が心不相応行を法として分類する根底には何らかの無為との関連があると考えられる。また、この無為との関連によって心不相応行のそれぞれの法が存在していると考えられるのである。

## 註

- <sup>1</sup> 心不相応行の先行研究として主なものをここに挙げる：「心不相応行」自体を取り扱った研究には水野 [1997a]、C.Cox [1995]、福田 [1990]、有部等の教理を論じているなかで「心不相応行」に論及しているものには櫻部 [1969]、吉元 [1982]、R.Kritzer [1999]、三友 [2008]、*AKBh* における心不相応行の語義解釈について論じているものについては加藤 [1983]、那須 [2008] などがある。
- <sup>2</sup> 水野 [1997a]p.369
- <sup>3</sup> *AKBh*.P.62,11-P.82 17 *AKBh* の十四法をそのまま採用して数える論書には『阿毘達磨順正理論』T29.396.c7-416.a28 がある。*Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāṅgī* (以下 *ADV*) p.85,15[128] では「然るに、得などの行として不相応なるものは十三である」と説かれ心不相応行が十三法であるとする。しかし、*ADV* p.85,15-p.114 7 では *AKBh* で説かれる十四法すべてが心不相応行として説明されている。すなわち、*AKBh* の心不相応行を *ADV* でも踏襲している。*ADV* で十三法とされるのは無想果 (*āsamjñika*) と無想定 (*asamjñi-samāpatti*) を一括りにして数えていると考えられる。それ故、*ADV* においても心不相応行に関しては *AKBh* と同様の捉え方をすると考えられる。この故に、*AKBh* における心不相応行が最も整理されたものである。
- <sup>4</sup> 『法蘊足論』T26.500c20-22、501b20-22  
 1. 得 2. 無想定 3. 滅 (尽) 定 4. 無想事 (果) 5. 命根 6. 衆同分 7. 住得 8. 事得 9. 処得 10. 生 11. 老 12. 住 13. 無常 14. 名身 15. 句身 16. 文身  
 『品類足論』T26.692c5-9  
 1. 得 2. 無想定 3. 滅 (尽) 定 4. 無想事 (果) 5. 命根 6. 衆同分 7. 依得 8. 事得 9. 処得 10. 生 11. 老 12. 住 13. 無常性 14. 名身 15. 句身 16. 文身
- <sup>5</sup> 『甘露味論』T28.979b28-c3  
 1. 成就 2. 無想定 3. 滅尽定 4. 無想処 (果) 5. 命根 6. 種類 (衆同分) 7. 処得 8. 物得 (事得)



9. 入得 (依得) 10. 生 11. 老 12. 住 13. 無常 14. 名衆 (身) 15. 字衆 (句身) 16. 味衆 (文身) 17. 凡夫性
- 6 『阿毘曇心論』 T28.830c21-831a9  
 1. 無思想 (無想果) 2. 無想定 3. 減尽定 4. 衆生種類 (衆同分) 5. 句身 6. 味身 (文身) 7. 名身 8. 命根 9. 得 10. 凡夫性 11. 生 12. 老 13. 住 14. 無常  
 『阿毘曇心論経』 T28.866a3-20 『雜阿毘曇心論』 T28.942c24-943b10  
 1. 無想 (無想果) 2. 無想定 3. 減尽定 4. 衆生種類 (衆同分) 5. 句身 6. 味身 (文身) 7. 名身 8. 命根 9. 法得 10. 凡夫性 11. 生 12. 老 13. 住 14. 無常
- 7 福田 [1990] では心不相応行の項目の変遷がもつ意味について考察している。得は聖者を定義する原理 (聖道の得) を意図して立てられている、それに対して初期の項目として数えられる三つの得 (依得・事得・処得) については、異生 (凡夫) を定義する原理 (異生に属することの獲得) を意図して立てられていると指摘している。そして聖者の重要性をより強調するために、この三つの得ではなく非得 (聖道の非得) として規定されるようになったと考えられることを述べている。また、これら三つの得は衆同分とも密接に関わるものであることを指摘している。
- 8 アビダルマ論書の成立年代に関しては櫻部 [1969]、廣瀬 [1990] に基づき発展段階を三期に区分して本稿の考察を行う。第一期論書: 『集異門足論』 『法蘊足論』、第二期論書: 『識身足論』 『界身足論』 『施設論』 『品類足論』 『発智論』 『婆須蜜所集論』 『大毘婆沙論』 『鞞婆沙論』 『甘露味論』、第三期論書: 『阿毘曇心論』 『阿毘曇心論経』 『雜阿毘曇心論』 *AKBh. ADV.*
- 9 『集異門足論』 には『法蘊足論』 のように心不相応行が項目を立てて述べられてはいない。しかし、「心不相応行」の語は示されている。それは以下の箇所である。  
 『集異門足論』 T26.377c2-4 復次思惟出離。及出離相応受想行識。及彼等起身語業心不相応行時。諸心尋求乃至分別名出離尋  
 『集異門足論』 T26.377c27-29 復次思惟無害。及無害相応受想行識。及彼等起身語業心不相応行時。諸心尋求。乃至分別名無害尋。  
 『集異門足論』 T26.378a23-25 復次思惟無害。及無害相応受想行識。及彼等起身語業心不相応行時。諸心尋求乃至分別名無害尋。  
 上記、三箇所は出離尋と無害尋と無害尋の三善尋を説く箇所である。出離と無害と無害、それと相応する受・想・行・識、それらが身・語業に等起する心不相応行を思惟する時の尋求・遍尋求・近尋求・心顛了・極顛了・現前顛了・推度・構度・構画・思惟・分別が三善尋の一つであると説く。心不相応行が何であるか、説明はない。しかし、「心不相応行」の語が示されている。同様に四無量を説く箇所でも次のように「心不相応行」の語が示される。  
 『集異門足論』 T26.392b7-16 四無量者。一慈無量。二悲無量。三喜無量。四捨無量。慈無量云何。答諸慈及慈相応受想行識。若彼等起身語業。若彼等起心不相応行。是名慈無量。悲無量云何。答諸悲及悲相応受想行識。若彼等起身語業。若彼等起心不相応行。是名悲無量。喜無量云何。答諸喜及喜相応受想行識。若彼等起身語業。若彼等起心不相応行。是名喜無量。捨無量云何。答諸捨及捨相応受想行識。若彼等起身語業。若彼等起心不相応行。是名捨無量。

さらに、非想非非想処を説く箇所では心不相応行は滅尽定であることが次のように示される。

『集異門足論』T26.392b24-28 非想非非想処云何。答非想非非想処略有二種。一定二生。若定若生所有受想行識。及有一類定所等起心不相応行。即滅想受定。是名非想非非想処。

<sup>10</sup> 『阿毘曇心論経』 T28.866.a8 非色不相応 説是有為行

『阿毘曇心論経』 T28.866.a20-22 非色者。非此法色自性。不相応者不相応無縁也。説是有為行者。行陰摂故。

<sup>11</sup> 『雑阿毘曇心論』 T28.943.b6 非色不相応 説是有為行

『雑阿毘曇心論』 T28.943.b8-10 非色者。此諸法非色性。四種及造色非分故。不相応者。無縁故。説是有為行者。他為故。為他故。

<sup>12</sup> 安慧 (Sthiramati) の註釈 *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā-nāma*、滿増 (Pūrṇavardhana) の註釈 *Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusāriṇī-nāma* でも *SAKV* と同様の語義解釈をする (那須 [2008] 参照)。

<sup>13</sup> 説き方の異なる「行」の語義解釈について、『阿毘曇心論』と『雑阿毘曇心論』では「有為であること」を強調し、有為に対して無為ではないことを説いていると考えられる。*SAKV* と『順正理論』では「無為ではないこと」を強調し、無為に対して有為であることを説いていると考えられる。いずれにしても「有為であって無為ではない」ことを説く。

<sup>14</sup> 『法蘊足論』 T26.501b16-23

<sup>15</sup> 心不相応行の語義解釈における「行蘊所摂」という語については加藤 [1983]、那須 [2008] のなかに言及されている。加藤 [1983] では心不相応行の語義解釈には色・心・心不相応行・心不相応行・無為という所謂、五位 (五事、五法) の観点から捉える立場と色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊の五蘊の観点から捉える立場がインドには併存していて、玄奘訳の『阿毘達磨俱舍論』は五蘊の観点から捉える立場であったと述べている。那須 [2008] では *AKBh* 本論自体の心不相応行の語義解釈は簡略な文面のため明らかではないが、*AKBh* の諸註釈書では五位の観点から註釈されていると述べている。また、玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』のなかでも「行蘊所摂」という語は見られる。しかし、先にも見たように *AKBh* のサンスクリット原典には見られない。真諦訳『阿毘達磨俱舍論』でも原典と同様に見られない。

<sup>16</sup> 吉元 [1982]P.235-238 でもこの点について重要視すべきことが指摘されている。それは次のように述べられる。

「心不相応行」という中で、「心」という表現は、この法が心の種類 (精神的法) であって色と異なることを示す。「不相応」なる語は、心と相応するところ心所と区別せんがためである。また、無為法は、無色であって心の種類ではあるが、所依や所縁がなく、心と相応せず、遷りかわる性質をもつ行蘊とは異なったものである。だから、その無為法と区別するために「行」と称するのである。

ここで、心不相応行が「心の種類」であり、しかも、「心と不相応」にして「行」であると説明されたことは、心不相応行の性格を考察する上において注目すべきことである。すなわち、心不相応行は無色法であって、感性的存在ではないことろの精神的なものであるが、心と相応することのない非心理的存在である。

従って、心不相応行とは、色・心・心所・無為のいずれにも属しない不特定の分類不能の法をまとめたものではなく、行として、生滅変化をまぬがれぬ有為なる非心理的過程という精神的存在の一分野をなすカテゴリーなのである。(P.238.2 ℓ-11 ℓ)

<sup>17</sup> 『集異門足論』 T26.369c6-7

<sup>18</sup> 水野 [1997b] では、部派によって無為に対する考え方が相違することを詳細に述べている。説一切有部が心不相応行とする滅尽定や生・住・異・滅のいわゆる有為の四相を無為とした部派があり、それが案達派・北道派であると『論事』に説かれていることや『大毘婆沙論』には有為の四相を無為とするのは分別論者であり、法蔵部は有為の四相の中の滅相のみを無為としたことが述べられている。

<sup>19</sup> 「無為」についての主な先行研究として水野 [1997b]、池田 [1988]、宮下 [1989a, b] などが挙げられ、涅槃が無為の本性であることが指摘されている。

<sup>20</sup> C.Cox[1995]p.67.

<sup>21</sup> *Dhs.*p.254 : rūpaṃ ca nibbānaṃ ca ime dhammā cittavippayuttā .

<sup>22</sup> 『集異門足論』 T26.1536.367c7-369b6. 上座部におけるのと同様に「心相応か心不相応か」という問いが設定され、上座部と相違して「行」に関しても諸門分別がなされている。

### 〈一次資料〉

*ADV* : “*Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtt*” Edited by Padmanabh S.jaini, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute 1977(2nd.ed.); *AKBh* : “*Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*” Edited by P.Pradhan, K.P.Jayaswal Reserch Institute 1967(1 st.ed.); *AKLA* : “*Abhidharmakośaṭīkā Lakṣṇānusārīṇī-nāma by pūrṇavardhana*” P.5597; *AKTA* : “*Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tatvārthā-nāma by Sthiramati*” P.5875; *Dhs* : “*Dhammasaṅgaṇī*” Edited by E.Muller, The Pali Text Society 1978, *SAKV* : “*Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*” Edited by Unrai Wogihara, Sankibo Buddhist Book Store 1971(1 st.ed.).

『阿毘達磨集異門足論』 T26.1536; 『阿毘達磨法蘊足論』 T26.1537; 『阿毘達磨品類足論』 T26.1542; 『阿毘達磨發智論』 T26.1544; 『阿毘曇心論』 T28.1550; 『阿毘曇心論經』 T28.1551; 『雜阿毘曇心論』 T28.1552; 『阿毘曇甘露味論』 T28.1553; 『阿毘達磨俱舍論』 T29.1558; 『阿毘達磨俱舍論』 T29.1559; 『阿毘達磨順正理論』 T29.1562; 『阿毘達磨藏顯宗論』 T29.1563; 『俱舍論記』 T41.1821; 『俱舍論疏』 T41.1822; 『俱舍論頌疏』 T41.1823.

### 〈二次資料〉

C.Cox[1995] : Collett Cox “*Disputed Dharmas Early Buddhist Theories on Existence*” *Studia Philologica Buddhica, Monograph Series 11.* Tokyo, The International Institute for Buddhist Studies; R.Kritzer [1999] : Robert Kritzer “*Rebirth and Causation in the Yogācāra Abhidharma*” *Wiener Studien zur Tibetische und Buddhistische. Heft 44.* Wien, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

池田 [1988] : 池田練太郎「<無為>説の起源について」(『仏教学』第25号) 1988年; 櫻部 [1969] : 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館 1969年; 加藤 [1983] : 加藤宏道「心不相応行の名義」(『印度学仏教学研究』31-2) 1983年; 那須 [2008] : 那須良彦「俱舍論根品心不相応行論 (1) 一世親本論と諸註釈の和訳研究一」(『浄土真宗総合研究』3)

2008年；西村 [2002]：西村実則『アビダルマ教学—俱舍論の煩惱論—』法蔵館 2002年；  
廣瀬 [1990]：廣瀬智一「第1章 アビダルマ論書」『梵語仏典の研究Ⅲ』塚本啓祥・松永  
有慶・磯田熙文・廣瀬智一・小林守・高野克宏・菅原泰典・才川雅明・中井本秀 編  
平楽寺書店 1990年 pp.47-100；福田 [1990]：福田琢「十四心不相応行の確立と得・非得」  
（『印度学仏教学研究』39-1）；水野 [1997a]：水野弘元「心不相応法について」（『水野弘元  
著作選集2 仏教教理研究』春秋社）1997年；水野 [1997b]：水野弘元「無為法について」  
（『水野弘元著作選集2 仏教教理研究』春秋社）1997年；三友 [2008]：三友健容『アビダ  
ルマディーパの研究』平楽寺書店 2008年；宮下 [1989a]：宮下晴輝「涅槃についての一  
考察」（『大谷学報』60-1）1989年；宮下 [1989b]：宮下晴輝「非摂滅無為」（『仏教学セミナー』  
第49号）1989年；吉元 [1982]：吉元信行『アビダルマ思想』法蔵館 1982年